

(4) 進歩とは何か（「反キリスト者」の4）

「進歩(der Fortschritt)」とは「一つの近代的理念」であり、「誤った理念」である。今日のヨーロッパ人はルネッサンスのヨーロッパ人よりも下位にある。「展開し続けること(Fortentwicklung)」は必ずしも「向上、上昇、強化」ではない。この「展開」の個別の成功例は「近代的理念」とは別の意味のものである。それは「より高い型」のもの、「一種の超人」である。そのような「偉大な成功の僥倖(Glücksfälle des grossen Gelingens)」は可能であったし、これからも可能であろう。事情によっては「大当たり(ein Treffer)」があるかもしれない。ⁱ

(5) 弱者の味方としてのキリスト教（「反キリスト者」の5）

キリスト教は「より高い型の人間」に決戦を挑み、「この型の根本本能」をすべて追放してきた。「強い人間」は「典型的に唾棄すべき者」、「邪悪な人間」となった。そして、キリスト教はあらゆる「弱者」、「低劣な者」、「出来損ない」の味方となった。それは「強い生の保存本能」に反対し、「精神性の最上の価値」を「罪深いもの」、「惑わすもの」、「誘惑」であると感ずるように教えてきた。ⁱⁱ

(6) 退廃・頹廢・没落（「反キリスト者」の6）

「人間の退廃(die Verdorbenheit des Menschen)」を覆う垂れ幕が開けられ、眼前に「痛ましい、身の毛のよだつ光景」が広がっている。ここで使う「退廃」という言葉は「人間の道徳的告発」を内容とする言葉ではない。むしろ、これまで「徳」や「神性」が最も意識的に切望されてきたところで、最も強く「退廃」が感じ取られるということである。この「退廃」は「頹廢(décadence)」という言葉と重なるが、今日人類が最上の願い事をまとめる「価値」すべてが「頹廢の価値」である。ⁱⁱⁱ

動物や種族や個体が、その「本能」を失い、自らに「不利なもの」を選んだり、優先させたりする場合、そのことを「退廃」と呼ぶ。「より高い感情の歴史」や「人類の理念の歴史」とは、「なにゆえ人類はかくも退廃してしまったのか」ということについての説明でもある。そもそも「生そのもの」は「生長のための、持続のための、諸力の蓄積のための、力のための本能」であり、この「力への意志」が欠けるところに「下降(Niedergang)」がある。^{iv}

ⁱ Ibid., 4, S.171

ⁱⁱ Ibid., 5, S.171

ⁱⁱⁱ Ibid., 6, S.172

^{iv} Ibid.